教育の目的は、人格の完成をめざし、平和的で民主的な国家及び社会の形成者として、必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければなりません。

人格の完成及び国民の育成の基盤となるものが道徳性であり、その道徳性を育てることが学校教育における道徳教育の使命です。

人間にとっての最大の関心は、人生の意味をどこに求め、いかによりよく生きるかということにあり、道徳はこのことに直接関わるものです。

そもそも人生は、誰かに任せることができなるものではありません。誰かの人生ではなく一人一人が自分自身の人生として引き受けなければなりません。他者や社会、周囲の世界の中でその影響を受けつつ、自分を深く見つめ、あるべき自分の姿を描きながら生きていかなければなりません。その意味で、人間は、自らの生きる意味や自己の存在価値に関わることについては、全人格をかけて取り組むのです。

また、人間としての生き方についての自覚は、人間とは何かということについての探究とともに深められるものです。人間についての深い理解なしに、生き方についての深い自覚が生まれるはずはないのです。言い換えれば、人間についての深い理解と、これを鏡として行為の主体としての自己を深く見つめることとの接点に、生き方についての深い自覚が生まれてきます。そのことが、主体的な判断に基づく適切な行為の選択や、よりよく生きていこうとする道徳的实践へつながっていくのです。(学習指導要領解説より抜粋)

私の中には、二人の「私」がいます。一人の「私」は、これまでの学習や経験によって蓄積された道徳的価値に基づいた価値観(善)によって司られている良心。もう一人の「私」は、良心からの指令も含め、様々な情報から、考え、判断し、態度を決定し、実践意欲を高めて行動する「私」です。

良心は、これまでの学習や経験の省察から蓄積された価値観によって、「善」とする見方や考え方を、もう一人の「私」に指令します。この価値観は、より普遍性のある道徳的価値に基づくものでなければなりません。そうしないと単なる独断に陥ってしまうからです。しかしながら、この価値観は、主観的なものであることには変わりありません。そこで、より普遍性のある価値観をめざすには、どうしても、自分も他者も正しいと考える価値観を、さらに、省察し、新たに蓄積していく必要が生じます。

ところが、自分も社会のどれだけ多くの人が正しいと考える価値観も、絶対的な価値観はなく、必ず、「そうは思わない」という人もいます。また、そのように社会の多数の人が、一致したり合意をしたりする価値観は、少数の人々に一方的におしつける危険性もはらんでいます。しかし、だからといって、自分も他者も正しいと考える価値観をめざした省察を止めてしまうと、みんなが自らの主観のみによって考え、判断して、「私の価値観こそが唯一のものだ」というようになり、危険な独断や価値観までもが同等に大切にされるような相対化した価値観がはびこってしまい、人として、自分も他者も幸せな、よりよい生き方ができる、より普遍性のある価値観を共有することができなくなります。

社会のすべての人が正しいとする価値観(普遍性のある価値観)は存在しないかもしれませんが、社会のすべての人が正しいと考えるであろう価値観をイメージして、それに向かって、「より」普遍性のある価値観を他者と共有する(了解点をもつ)ことはできます。そして、もしも、そういった価値観を共有できたということになれば、そのことによって、集団(コミュニティ)が形成されたということになり、さらに、その構成員たる自分も、話し合いの結果もたらされた、より普遍性のある価値観を了解

したということで、自らの良心の「善」の中に客観性が持ち込まれ、主観性と客観性を併せ持った、よりよい見方や考え方をすることができるようになっていくのです。

そのように考えると、より普遍性のある価値観は、集団やその個人に対して、指令性と優位性をもった上位の価値観となるので、常に、集団や個人は、それが了解できるものであるよう点検や修正がなされなければなりません。また、集団や個人は、了解した価値観の指令性や優位性に対して、それらを認めることができるような尊敬の念や憧れといった感情を伴うことも必要になります。つまり、了解した価値観によさやすばらしさが備わっていて、そのよさやすばらしさを実感したり、それを体現するような人やその生き方に触れさせたりする中で、その感情を高めていくことも重要になってきます。

このように、学習や経験の省察から、より普遍性のある価値観をイメージする理性と、それへの尊敬の念や憧れの感情を高める感性の両方を育てていくことが道徳性を養うことであり、このような集団や個人が形成されることが、その先の姿ではないかと考えています。

では、なぜ、道徳教育や道徳科で道徳的価値についての学習を進めていかなければならないのか。

良心は、常に、最適な価値観を指令します。それは、他者から指示されたものではなく、これまでの学習や経験などによって蓄積された「善」の見方や考え方です。それが、独断に陥らず、より普遍性のある価値観へ深めていくのが学習や経験です。例えば、腕にけがをしている友達が重いものをもとうとしているところを見たとき、すぐに、「親切にせよ」という指令が発せられたが、友達は、けがの機能回復に向けて、自分のことは自分でやろうとしていたということもあります。ただ、困っていると思われる人に手を出して助けることだけが親切ではないということを学ぶことが、道徳教育であり、道徳科であります。

ただ、良心の「善」は、自分が学習や経験から蓄積された見方や考え方である以上、普遍性のある道徳的価値ではありません。全ての人が正しいと、自分が思っているだけであって、現実的にそうであるとは限らないからです。だからといって、普遍性のある道徳的価値観という視点を放棄してしまうと、非常に狭い学習や経験からのみの道徳的価値に基づいた見方や考え方となり、独断に陥る可能性を高めることとなります。そうならないように、常に、より普遍性のある道徳的価値は、いかなるものかという視点で学習や経験を積み重ねていく必要があります。これはもう、一時期だけの問題ではなく、生涯にわたって追求していかなければなりません。そのためにも、道徳的価値への見方や考え方について、友達と話し合い、互いの考え、価値観のよさや理解できるところに目を向け、みんなが、了解できる点を探っていく学習も取り入れたいところです。その了解点によって、クラスみんながめざす姿がイメージされ、よりよい生活に進んでいくことが期待されます。また、そのことによって、自分の考えや価値観に客観的な視点が持ち込まれ、自分にとっても見方や考え方を深めることができます。

そのように、道徳的価値に基づいた見方や考え方が蓄積された良心は、いかなる条件も考慮せず、常に、最善の指令を送りますので、もう一人の「私」（思考し、判断する自分）がそれに従って、すぐに、行動に移すことがあります（直観的判断）。ところが、指令を受けた、もう一人の「私」が、それに抗うことがあります。指令通りに考えようとする、現実的に自分が置かれている状況や事情では、自分の利益が損なわれる、恥ずかしいなどの理由で受け入れることができない、または、道徳的行為を躊躇してしまう。そこで、葛藤が生じ、直観的判断ができないこととなります。それでもなお、良心からの指令に従うには、もう一人の「私」が、良心や良心からの指令に対して、リスペクトしていることが大切になります。そのためにも、学習や経験の中で、道徳的価値や道徳的行為、道徳的行為を行った人に対して、そのよさやすばらしさを感じておくことが大事になります。そういう蓄積があって、葛藤場面でも、「やっぱり、良心の指令に従おう」という判断ができることが期待されます（優位的判断）。つ

まり、もう一人の「私」には、思考や判断を司る理性的な自分と道徳的価値にリスペクトする感性的な自分がある、その協同が、葛藤を乗り越える力になります。感性的な自分は、良心に抗って葛藤も生み出しますが、良心からの指令に従おうとする原動力にもなるので、様々なことにいろいろなことを感じられるきめ細やかな感性も学習や経験で育てていく必要があります。

また、感性的な自分は、より普遍性のある道徳的価値に基づいて考え、判断し、行動したと思われるとき幸せを感じます。行為の結果によって得られる他者からの称賛がある場合は勿論のこと、たとえ、それが無くても、自分の行為に幸せを感じます。この幸せ感が、良心へのさらなるリスペクトや道徳的行為への意欲を生み出していきます。そのためにも、教材の中で、「受ける風が心地よかった」「足取りが軽くなった」などの表現で表される登場人物の幸せ感をしっかりと感じ取ったり、ボランティア活動で、地域社会の役に立った満足感などを得たりすることが求められます。

葛藤ではなく、複数の同程度の価値観による迷いの場合は、モラルジレンマになります。ジレンマの場合、もう一人の「私」は、どちらに判断しても、道徳的価値に基づいた判断となるので、より優位と思われる普遍的な価値観に基づいて判断することになりますが、それだけでなく、対立する両方の価値観を止揚する見方や考え方を求めていくことができるようにしたいものです（止揚的判断）。

誰しもがよく出会う葛藤やジレンマに対して、それでも、より普遍性のある価値観へ深めていく判断、優位的判断と止揚的判断を合わせて省察的判断と呼んでいます。これも、学習と経験によって培われていくところが大きいと言えます。

【まとめ】

私の中には、良心がいる「私」と、もう一人の「私」がいて、良心からの指令に従って考え、判断し、最善の態度を決めます（直観的判断）。

もう一人の「私」の中には、理性的な自分と感性的な自分があります。理性的な自分と感性的な自分は、ときには、争い合う（葛藤）こともあります。感性的な自分は、そのよさやすばらしさを感じる力で、それを乗り越えることができます（優位的判断）。ジレンマに陥った場合には、優位的判断をする場合と止揚的判断をする場合があります。

話し合いによって、互いに共有できた価値観によって、みんなでよりよい生活をめざしたり、自分の中の見方や考え方に客観的な視点を持ち込めたりできます。

これらによって行為した結果に幸せを感じることも感性的な自分の大きな役割です。（福德の一致）この幸せ感は、良心へのリスペクトにつながり、理性的な判断への自信につながります。

このようなことが、自らの考えや判断、行動への自信と自己の確立につながり、より幸せな生き方、人生に向けての指針になるでしょう。

こうしたことも担っているのが、道徳教育と道徳科です。私たちは、子どもにとって、「人格の完成をめざした」「自分に問いかけ続ける旅」の途中だと思い、子どもの「その先」をしっかりと見つめてやっていきたいものです。

「道徳は、教師の道徳でもある」・・・子どもだけでなく、私たちも共に、より普遍性のある価値観へ見方や考え方を深めていく教育の主体でありたいと願っています。